

2023

第 30 回守谷市青少年海外派遣事業報告書

令和 5 年 7 月 26 日(水)~8 月 2 日(水)



守谷市

目 次

● 守谷市長あいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・	1
● 守谷市国際交流協会会長あいさつ・・・・・・・・	2
● 第30回守谷市青少年海外派遣団員名簿・・・・・・・・	3
● 事前・事後研修カリキュラム・・・・・・・・	4～5
● ホストファミリー名簿・・・・・・・・	6
● 海外派遣日程・・・・・・・・	7
● ドイツ・マインブルク市周辺地図・・・・・・・・	8
● 思い出の日記・・・・・・・・	9～16
● 派遣団員報告書・・・・・・・・	17～39
● マインブルクの新聞に掲載された記事・・・・・・・・	40～41
● フォトメモリー・・・・・・・・	42～43
● 保護者の声・・・・・・・・	44
● 編集後記・・・・・・・・	45



夢に向かって

守谷市長 松丸修久

第30回守谷市青少年海外派遣も、多くの皆様のご協力により無事に終了いたしました。マインブルク市への派遣は、今回11回目となりましたが、これまでと変わらず、フィヒトナー市長をはじめ、マインブルク市民の皆様が派遣団を快く迎えてくださったことに、心より感謝の意を表したいと思います。

新型コロナウイルス感染症の影響で、本市と国際姉妹都市における人と人の直接的な交流を一時的に中断せざるを得ず、とても心苦しく思っておりました。しかし、昨年度のマインブルク市の学生訪問団の来市をはじめ、この度の青少年海外派遣と、本市と国際姉妹都市における人と人との交流が再開できたことを大変うれしく思います。団員の皆さんには、守谷市の代表としてマインブルク市を訪れていただきました。現地では、言葉や文化の違いにより戸惑いもあったと思いますが、マインブルク市の皆様の優しさや温かさに触れ、遠く離れた地に理解し合える友や家族を得たことは、皆さんにとってかけがえのない財産となることでしょう。

団員の皆さんには、この派遣を通じて得た貴重な経験、築いた交流の絆を、これからの皆さんの生活の中で、さらには将来の夢への実現に向けて活かし、国内にとどまらず世界を舞台に活躍され、新しい守谷市を担っていく人材となっただけのことを期待しております。

最後に、本事業を実施するに当たりご協力をいただきました守谷市国際交流協会をはじめ、保護者、関係者の皆様に心から感謝を申し上げ、ご挨拶いたします。



国際交流の輪

守谷市国際交流協会会長 小川一成

第30回守谷市青少年海外派遣事業が、無事成功のうちに終わられたこと
をお喜び申し上げます。

平成2年にこの事業が始まって以来、守谷市国際交流協会は姉妹都市との
市民交流を推進し、市の国際交流の発展に寄与するため、全面的に支援、協力
してまいりました。

今回は、新型コロナウイルス感染症の影響により、4年ぶりに再開できたこ
とをうれしく思います。この事業は海外旅行とは異なり、現地のホストファミ
リーに受け入れていただくということが特徴であり、誰もが簡単に体験でき
るものではありません。ホストファミリーと過ごした時間、マインブルク市で
の体験、目で見た光景、特にグリーンの壁のようなホップ畑、国際交流への高
い関心と意欲を持っている中学生・高校生の皆さんにとっては、この上ない財
産になるはずです。今回派遣された団員の皆さんは、お世話になったホストフ
ァミリーをはじめ、滞在中にかかわったすべての方々に対しての感謝の気持
ちを胸に、帰国したことを思います。

今回の事業を通して国際交流への興味が深まった団員の皆さんには、ぜひ
当協会の活動にも積極的に参加していただき、一緒に守谷市の国際交流を盛
り上げていただきたいと考えております。

結びに、守谷市と姉妹都市マインブルク市との交流が益々発展することを
祈念申し上げ、ご挨拶といたします。

第30回守谷市青少年海外派遣団員名簿

●団員

氏名		学校	学年
佐藤 朱里	さとう あかり	守谷市立守谷中学校	中2
池場 美輝	いけば みき	私立茗溪学園中学校	中3
大平 顕	おおひら あきら	守谷市立愛宕中学校	中3
蒲池 真央	かまち まお	守谷市立けやき台中学校	中3
藤見 叡悟	ふじみ えいご	茨城県立並木中等教育学校	中3
菊池 小夏	きくち こなつ	茨城県立竹園高等学校	高1
沼田 拓志	ぬまた たくじ	茨城県立竹園高等学校	高1
本間 怜奈	ほんま れいな	茨城県立下妻第一高等学校	高1
上田 未麗	うえだ みれい	筑波大学付属高等学校	高2
佐藤 丸	さとう まる	茨城県立竹園高等学校	高2

●引率者

氏名		所属
吉田 篤子	よしだ あつこ	守谷市国際交流協会
島田 晃広	しまだ あきひろ	守谷市役所生活経済部市民協働推進課

事前・事後研修カリキュラム

事前研修(全4回)				
月 日	曜日	時間	内容	場所
6 月 11 日	日	9:30～	挨拶 提出物、スケジュール等の説明	市役所 大会議室
		10:00～	旅行業者説明(東武トップツアーズ株式会社)	
		11:15～	ホームステイ受入保護者の体験談(徳田さんファミリー)	
		11:50～	海外派遣団員自己紹介、昼休み	
		13:00～	講話「国際化ってなんだろう？」 講師:MIFA 塩澤さん	
		15:00～	グループワーク Part1	
		15:40～	ドイツを知ろう	
		16:20～	フェアウェルパーティーについて	
		16:50～ 17:00	提出物の回収、事務連絡(次回の研修等)	
6 月 25 日	日	9:00～	挨拶・ウォーミングアップ	市役所 和室
		9:05～	ドイツ語講座	
		9:40～	グループワーク Part2 「アレックス君のホストファミリーになったら」 (ホームステイの心構え・注意点)	
		10:20～	リーダー・副リーダー決め	
		10:35～	フェアウェルパーティーの準備	
		11:35～	ホストファミリー発表	
		11:45～ 12:00	提出物回収、事務連絡(宿題・次回の研修等)	
	日	9:00～	挨拶・ウォーミングアップ	市役所

7 月 9 日		9:10～	マインブルク派遣者の体験談(吉田伊織さん)	大会議室
		10:00～	私・僕のホストファミリー	
		10:30～	英語で自己紹介・家族紹介	
		11:20～	フェアウェルパーティーの準備	
		11:50～ 12:00	事務連絡(援助申請書回収)	
月 日	曜日	時間	内容	場所
7 月 24 日	月	14:00～	挨拶・ウォーミングアップ	市役所 大会議室
		14:05～	こんなときどうする！？	
		14:25～	荷物の確認	
		14:45～	青少年海外派遣事業でやりたいこと	
		15:20～	フェアウェルパーティーの最終準備・練習	
		16:00～	結団式	
		16:30～ 17:00	事務連絡(宿題・次回の研修等)	
事後研修				
8 月 9 日	水	14:00～	提出物の確認	市役所 大会議室
		14:05～	グループで海外派遣体験共有	
		14:25～	私・僕のマインブルク市	
		16:10～	MIFA の説明	
		16:25～	団長・引率・担当からのメッセージ	
		16:45～	派遣団員のホームステイまとめ・今後の抱負	
		16:55～ 17:00	第 30 回青少年海外派遣団解団宣言	

ホストファミリー名簿

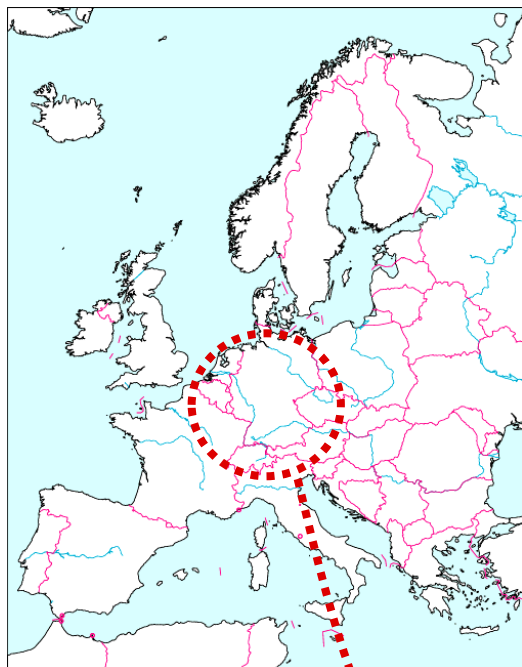
令和 5 年度派遣団員	ホストファミリー
佐藤 朱里	レンメル家
池場 美輝	ベーズル家
大平 顕	ホーフシュテッター家
蒲池 真央	レーデル家
藤見 叡悟	ヘルツル家
菊池 小夏	レーデル家
沼田 拓志	ヤスダ＝シュタンゲルマイヤー家
上田 未麗	アウトヴァッサー家
本間 怜奈	ラングヴィーザー家
佐藤 丸	ヘルツル家

令和 5 年度引率者	ホストファミリー
吉田 篤子	シェーンフーバー家
島田 晃広	ヘトシャ家

海外派遣日程

日程	プログラム
7月26日(水)	日本 TX 守谷駅(秋葉原・品川経由)→東京国際空港(羽田空港) →ナルフトハンザ航空 LH715(9:40 発)→ドイツへ ドイツ ✦ミュンヘン空港到着・バスでマインブルクへ マインブルク市「テレーズィエン・ヒュッテ」で夕食(ホストファミリーと一緒に) ・ホームステイ開始
7月27日(木)	・マインブルク市長表敬訪問 ・ノイシュヴァンシュタイン城、マリエン橋、アルプ湖見学
7月28日(金)	・ホスト子どもと一緒に成績表を受け取りに学校へ行く ・パン作り体験後、ピクニック ・シュティーゲルマイヤーホップ農場見学+軽食 ・ホストファミリーと自由時間
7月29日(土)	ホストファミリーと終日過ごす
7月30日(日)	※7月30日(日)夜 ・姉妹都市交流会@「ホーフカフェ・リントキルヒエン」 ・フェアウェルパーティー、2002年に守谷に来市したマインブルク市民にタイムカプセルの手紙を返す、ゲーム&ビュッフェ
7月31日(月)	ミュンヘン観光 ・ヴィクトアリエンマルクト市場にて朝食 ・ミュンヘン市役所→塔の展望台、カラクリ時計 ・「ホーフブロイハウス・ミュンヘン」にて昼食 ・歩行者天国でショッピング ・ミュンヘンバスツアー ・マインブルクへ戻る、ホストファミリーとの時間
8月1日(火)	出発日 ・朝食後出発 ・ミュンヘン空港 LH714(現地 12:35 発) ・東京国際空港(羽田空港)から守谷駅へ ・市役所にて帰国報告会、解散

ドイツ・マインブルク周辺地図



ドイツ連邦共和国
Bundesrepublik
Deutschland

面積 約 35 万 7,121 km²
人口 約 8,440 万人 (2022 年現在)
首都 ベルリン (Berlin)



バイエルン州
マインブルク市
Stadt Mainburg

面積 約 61,65 km²
人口 約 15,443 人 (2022 年現在)



思い出の日記



6月11日(事前研修①)

今日が初めての研修でした。私は面接のとき、ずっと緊張して終わった後は汗びっしょりでした。当たり前ですが、研修に来るということはあの面接で合格通知がきた人しかいないというわけです。今だから言えますが面接のときと同じくらい緊張しました。行ってみると自分と同じ高校2年生は他に一人しかいなかったけれど、受験生である中学3年生は4人もいました。余裕があるなあなんてことを考えていると研修が始まりました。

東武トップツアーズさんの保険の説明や実際にマインブルクで何をするのかなどの説明がありましたが、正直全く実感が湧きません。本当に自分がこのメンバーとはるか遠い西の地へ行くのか？誰かの代理でこの研修に出席しているのではと思うほど実感がなかったです。とりあえず一回目の研修は乗り切れましたがこの研修もあと3回しかないといえます。おそらく次回は緊張しないだろうけれど、この実感が湧かないのが逆に不安です。次の研修では少しでもいいからリアリティを持つようにしたいです。

(佐藤 丸)



6月25日(事前研修②)



2回目の研修は、やはり緊張しませんでした。前回一緒にお昼を食べた藤見くんとも仲良くできました。2回目はドイツ語講座で、ドイツ語はやはり難しいです。当たり前のように、英語の短文ほどの長さの単語があります(ノイシュヴァンシュタイン城も長い)。調べてみると男性名詞と女性名詞というものもあるらしいです。

前回実感が湧かなすぎて逆に不安でしたが、今回はマインブルクで言葉が通じないシチュエーションを想像して不安になっています。確かにリアリ

ティは欲しかったけれど、違う不安が出てきてしまいました。

研修ではフェアウェルパーティーの準備をしました。あと2回で何をするのか、手順はどうするのか、小道具は使うのか、使う場合自分たちで用意するのかマインブルク側に用意してもらうのかなど諸々を決めなければならないというので、ちゃんと議論しました。守谷音頭の説明の係になったので、原稿を書いてステージ上で説明しなければなりません、頑張りたいと思います。

(佐藤 丸)

7月9日(事前研修③)

この日はまず、過去にドイツに行った先輩団員の方からお話を聞きました。美味しかった料理や気をつけるべき点なども教えてもらい、後に荷物を準備する際にはとても役に立ちました。



その後は、他の団員にホストファミリーの紹介をしました。これまでのメールでのやり取りを振り返って相手はどんな人なのか、言葉にすることで自分も知ることができました。

また、英語でホストファミリーに自分と家族のことを紹介する練習も行いました。2人ずつに分かれて、質問をすることで実際に会話の想定ができ、自信に繋がりました。(池場 美輝)



7月24日(事前研修④～結団式)

これが最後の事前研修でした。荷物の確認を行なった後に、何かあったときの対処法などを確認しました。また、フェアウェルパーティーの準備も最終確認に入り、通しで練習を行いました。

最後に保護者や市長にも来ていただき、結団式が行われました。自分たちに向けてのメッセージをいただき、本当に行ってくるんだな、とこのときになってようやく実感がわきました。保護者にはこれまでの感謝を伝える手紙を送りました。親の方が泣いていましたが、それだけ自分のことを思ってくれていることが伝わり、少し嬉しかったです。次に皆と出会うのはとうとう出国日です！

(池場 美輝)



7月26日(出発日)

待ちに待った出発日。特にみんなが緊張と期待で胸がいっぱいだったと思います。守谷駅に集合したのは朝の 5 時 20 分。とても早くみんな眠そうでした。出発前には保護者のみなさんが「いってらっしゃい」「気をつけて」と書いた紙を掲げて私達の背中を押してくれました。団員のみんなは恥ずかしいなどと言っていたけれど、緊張をほぐしてくれたと思います。



電車に乗ると、会話が弾みました。友だちと話したり、団長や島田さん、添乗員の美土路さんと話したりしました。羽田空港が近づくに連れ、みんなのテンションが上がり、羽田空港についたときには、ここからドイツに旅立つのかとみんな夢見心地でした。飛行機に搭乗するまでは時間が多くあり、各々自由に過ごしました。

飛行機を満喫するために仮眠を取ったり、空港で買い物を楽しんだり、写真を取って楽しむ人もいました。そして搭乗し出発。座席のモニターで日本を離れる瞬間を見て、日本を離れたんだと実感しました。フライト中は寝たり、映画を見たり。途中で機内食を食べ、また寝たり、映画を見たり、充実したフライトでした。



ついにミュンヘン空港に到着。フライトで疲れた事を忘れたかのようにみんなドイツに着いたんだと大喜びしていました。空港で現地の方々から歓迎を受けました。周りの人たちは誰一人として日本語を話さないため、みんな緊張していました。バスに乗り、歓迎パーティーの会場に出発しました。バスの中では束の間の休息。みんなホストファミリーに会いたいとウズウズしていました。会場についてホストファミリーと初めて対面し、

会話を楽しんだことで、緊張がほぐれたようでした。

その後はみんなで夕食を取りました。初めて食べる料理に感動し、日本料理には戻れないかもとも思いました。ホストファミリーと食べる夕食は忘れられないものになりました。その後はそれぞれの家に行ってドイツでの生活が始まりました。おみやげを渡したり、お互いのことを詳しく話したりして、長い夜を過ごしました。思い出に残る、長い一日でした。

(沼田 拓志)

7月27日(マインフルク市役所表敬訪問～マインフルク観光)



この日はマインブルク市庁舎訪問、ノイシュヴァンシュタイン城とヴィース教会見学、アルプ湖散策と盛りだくさんの一日でした。

朝、初めてマインブルクの中心部を訪れてとても感動しました。石畳の道に三角屋根でパステルカラーの建物がそこら中にある、街全体がまるで童話のテーマパークのようです。フィヒトナー市長はとても気さくな方で、市長の椅子に誰か座ってみたい人はいるかい？と笑いを誘っていました。

その後バスで城へ行く途中、鮮やかな芝生と牛たちの奥に雄大なアルプスが見えてあまりの非日常さに「ここは絵画の中か?!」と思いました。駐車場からノイシュヴァンシュタイン城までは徒歩で一時間ほどありましたが、ホストシスターのクリスティーナ達とドイツと日本の雪や温泉の話をしていると一瞬でした。城の内部はガイドさんが案内してくれて、シャンデリアの飾りは宝石ではなく色付きガラスなのだということなど、英語でしたがたくさんのトリビアを知ることが出来て楽しく、荘厳な建築に圧倒されました。また、私の好きな Taylor Swift が昔訪れて、MVのモデルにしていた場所なので個人的にとってもテンションが上がりました。

昼食にはドイツのホットドッグをクリスティーナがごちそうしてくれました。ジューシーな本場のソーセージはもちろん、パンがもちもちで美味しかったです。午後行ったアルプ湖は澄んだ水の中でカモたちが戯れていて綺麗でした。世界遺産のヴィース教会は迫力のある建物で、内部の装飾が豪華で目が眩むほど印象的でした。
(菊池 小夏)

7月28日(学校訪問～パン作り体験～農場見学)

7月28日は、私はすでに夏休みでしたがホストシスターは学校に行くということで、私もホストマザーに車で学校まで連れて行ってもらいました。学校までなんと車で5分！この近さは羨ましい限りです。ドイツでは7月は学年末で成績とアルバムをもらったようなので、ホストシスターと、彼女と仲のいい友達と一緒にそれを眺めました。ドイツの子にかわいいと言ってもらえてお世辞でも照れてしまいました。カッコいいと言われた人もいたようなのでもしかしたらドイツでは日本人はモテるのかもしれませんが。



パン作り体験では事前に生地を寝かせてくれていたので私たちは混ぜてこねるだけでした。しかし、それだけでも難しかったし大変でした。そして、パンが焼き上がるのを待っている間にタイムカプセルのために20年後の自分への手紙を書きました。30代になった自分が全く想像できず書くのは思ったより大変でした。

その後、パンを受け取ってホップ農場に行きました。ホップを育てているところを見たことがなかったのですが、想像とは異なり高い植物でした。地上7m 地下1mで合

わせて8mにもなるそうです。ホップを使った石鹸作りではそれぞれ色々な形の石鹸を作りました。私は小中サッカーをやっていたこともありドイツで有名なサッカーボールの模様を刻むのに挑戦しました。ドイツの方々はずごいと言ってくれましたが、変な模様になってしまいました。それも思い出です。

この日は一日中ずっとホストシスターと一緒に過ごしました。前日のお城見学のバス移動の際は疲れで寝てしまいホストシスターとあまり話せていませんでしたがこの日たくさん話して仲を深めることができました。（上田 未麗）



7月29・30日(ホストファミリーと過ごす・フェアウェルパーティー)



◆7月29日

この日はドイツに来てから初めてホストファミリーと一日中過ごせる日でした。この日で一番楽しかったことはドナウ川で船に乗り、大きな岩を見たりしたことです。

その後、船を降りて、Weltenburger Kloster という世界最古の修道院醸造所をみました。そして帰りの船に乗る前にドナウ川でみんなと一緒に水切りをして遊びました。船からはドナウ川がとても近くから見えて迫力がすごかったです。

Weltenburger Kloster では色々なところを教えてもらいながらみました。とても綺麗でした！！また、ドナウ川の近くには石がたくさんあってどの石も角がなく丸く

て驚きました。たくさんの人が水切りをされていて挑戦しましたが全然はねなくてお母さんの Franziska がコツを教えてくれたけれどむずかしかったです。他にもレーゲンスブルクやショッピングに行っておアイスクリームを食べたり色々なところを観光したりしました。とても楽しくて一日があっという間に終わってしまいました！

(蒲池 真央)



◆7月30日

この日はホストファミリーとのお別れ会、フェアウェルパーティーをしました。初めに団長の吉田さんのドイツ語の挨拶の後、私たちの発表がスタートしました。一つ目は団員二人による柔道技の実演です。背負い投げの披露により、会場から歓声があがりました。次に新聞紙でかぶとを作りました。会場にいる一人ひとりに新聞紙を配り、団員の一人が英語で説明をし、他の団員は

各テーブルを回りながらかぶとを一緒に作りました。英語が正確に伝わらない時があり、大変でした。かぶとが完成すると、会場にいるドイツ人たちはとても嬉しそうに頭にかぶとを乗せていました。続いては守谷音頭を踊りましたがちょっとしたハプニングが起こりました。リハーサルの際は円になって踊っていましたが、実際に踊る場所が思っていたより狭く、円になるスペースがなかったのです。しかし団員のとっさの判断で一列になって踊ることが出来ました。団員同士の団結力を感じられた場面でした。するとかぶとをかぶったホストシスター、ホストブラザーが前に出てきてくれました。みんなで踊ったことで、会場に一体感が生まれ、楽しい雰囲気になりました。興奮冷めやらぬ中団員それぞれが事前に用意しておいたホストファミリーへの感謝の手紙を読みました。みんな思い思いに感謝の言葉を伝えることができました。感動的なメッセージもあって、会場には泣いている人もいました。最後に会場にいるホストシスター、ホストブラザーと一緒に「バイエルンオリンピック」の三つの競技を行いました。私とホストシスターが行ったのは小さなカップを小さな釣り竿でとる競技です。残念ながら私たちは優勝することはできませんでしたが、日本では体験できない競技を行なえるだけでも楽しむことが出来ました。会場には現市長、元市長が来て下さいました。それだけ私たちは歓迎されていたのだな、と実感できとても嬉しい気持ちになりました。フェアウェルパーティーは私たちにとって、旅の最後を締めくくる最高の思い出になりました。(佐藤 朱里)

1月31日(ミュンヘン観光)

ホストファミリーと一緒に過ごす最後の日は、みんなでミュンヘン観光でした。バスで目的地に向かうまでの間も、みんな外の景色に釘付けで、たくさん写真を撮っていました。見るものひとつひとつが日本とは異なっていてとても新鮮でした。

お手洗いをを使うのにもお金がかかったり、日本と比べてビルなどの高い建物がなかったり、日本との文化の違いがおもしろかったです。

レストランでソーセージを食べ、自由時間にはホストファミリーとお買い物を楽しみました。みんなバックがいっぱいになる程、お土産を買っていました。帰りにはオリンピック公園に行き、空中ブランコに乗ったりして楽しみました。とても充実した一日になりました。(本間 怜奈)

8月1日・2日(帰国・帰国報告会)

僕たちの別れは突然やってきました。まだあって数日しかたっていないのに、僕たちは良い友達になりました。朝ごはんを急いで食べ、またいつか会えることを信じて、僕たちはマインブルクを後にしました。帰りのバスでは、渋滞に巻き込まれましたが、無事飛行機に乗ることが出来ました。

帰りの飛行機ではみんな疲れて、爆睡だと思っていたけれど、みんな映画を見たり、ドイツ中にとった写真を見返したりしていました。機内で食べたすき焼きがとてもおいしかったです。日本についたときに、すごく安心したのを覚えています。どっと疲れが出たので、早く家に帰りたかったですが、市役所に行かなければいけないので電車ではゆっくりしました。うちに帰ったらすぐ寝ました。(藤見 叡悟)

帰国報告会の時はみんな疲れきっていて元気がない中、市長や教育長のお話を真剣に聞いていました。ドイツでの経験したことなどについて感想を話し、最後にはみんなで今後への意気込みを発表して写真撮影をしました。(大平 顕)



8月9日 事後研修

最後の研修では、みんなで思い出に残っていることを1人ずつ発表していききました。マインブルクはあまり大きな市ではないことからそれぞれが連れて行ってもらった場所が共通していて面白かったです。



さらに、3人ずつ男女混合のグループを作り、1週間のなかで困ったことや、家の間取り、どのようなご飯を食べたかということについて話しました。そして研修の途中から新しい守谷市の国際交流員が来てくれて、みんなで少し話しました。研修が終わった後に集合写真を撮って思い出を残せたことも良かったです。一緒にドイツに行った人の中にも守谷市国際交流協会に入会する人がいるようなのでみんなでこれからも国際交流を続けていこうと思います。(大平 顕)

派遣団員報告書

佐藤 朱里

池場 美輝

大平 顕

蒲池 真央

藤見 叡悟

上田 未麗

菊池 小夏

沼田 拓志

本間 怜奈

佐藤 丸

吉田 篤子（団長）

島田 晃広（引率者）



■ 守谷市立
■ 守谷中学校
■ 2年 佐藤 朱里

ドイツで挑戦したこと

知らない言語が飛び交う家庭の中で翻訳アプリをあまり使わずに積極的に会話をしました。

また、食べたことがない他国の料理を、恐れずにまずは食べてみました。そして、日本にいるときはあまり自分の意見を自分から言うことはなかったのですが、海外は日本と文化が大きく違ったり、気候が大きく違ったりしたので、寒いと思ったらはっきり言ったり、生活の中で分からないことがあったらすぐ尋ねることができました。

ホストファミリーの紹介

私のホストファミリーは、私のことを家族のようにとても気にかけてくれました。ホストファザーの Joe は、いろいろな食べ物の知識を教えてくださいました。ホストマザーの Manja は、たくさんのおいしい料理を作ってくれて、起床時には部屋に来て「Good morning」と言ってくれました。長女の Nina は、今は一人暮らしをしているのに、私のためにわざわざ家に来て誕生日プレゼントを渡しに来てくれました。私の一つ上の Lilli は、他の家族がドイツ語しか話せないため、英語に通訳して私に話してくれました。長男の Justus は、とても積極的に私に話しかけてきてくれて、楽しい遊びを教えてくださいました。次男の Theo は、人見知りなのか、一緒に話す機会はあまりなかったけれど、何度か私の名前を呼んでくれて、最終日私がバスに乗る直前に私に抱きついてきて、大泣きしていました。とても可愛い弟が出来た感覚でした。私のホストファミリーは Lilli 以外英語が話せず、スムーズな会話が出来なかったけれど、私のことをいつも気にかけてくれる優しい家族でした。

今後に活かしたいこと

一つは、積極的に話しかけてみることです。ドイツの滞在期間中、ホストシスターの Lilli が通っている学校に行くことができました。Lilli の隣に座っていた男の子に勇気を出して英語で「Hello」と声をかけてみたところ、英語で返してくれて少しだけ会話することが出来ました。その時初めて会った異国の人と会話できたことは、今まで味わったことのない嬉しい出来事でした。ドイツで育んだ積極性を今後も活かしていきたいです。



私の初めてのドイツ

私にとってこのドイツ派遣は人生で初めての海外で、「気温は日本とどれくらい違うのだろう」とか、「飛行機はどんな感じなのだろう」などの不安がありました。そして何より1番の不安が、「会話を続けることができるだろうか」という不安でした。事前研修で、マインブルク市での主要言語はドイツ語であり英語は完璧ではない、と聞いていました。しかし実際ドイツに行ってみると、思っていたより現地の学生は英語が流暢で驚きました。英語は授業などで触れていたため、翻訳アプリをあまり使わず会話することが出来ました。同じ夏でも気温は日本より低く、特に夜は想像していたよりも寒かったため、ホストファミリーから上着を借りる必要がありました。そのため、ドイツに行く前にホストファミリーに「どれくらいの気温の時にどのような服装をしているのか」を聞いておけば良かったと後悔しました。

また、私は事前に「遊園地に行きたい」とホストファミリーに伝えてありましたが、私の希望を叶えるためにホテルの予約までとってくれたり、ドイツでしかできない体験を計画してくれたことにとても感激しました。フェアウェルパーティーではホストファミリーに感謝の手紙を読みました。英語で読んだためホストファザーやホストマザーは手紙の内容が分からなかったはずなのに、まるで我が子の発表会を聴いているかのように笑顔でうなずきながら聴いてくれているのを見て、涙が出るほど嬉しかったです。ドイツに私のもう一つの家族ができました。その家族との関係をもっと深めていき、守谷市とマインブルク市の交流をさらに広げていく役に立っていければと思います。このような機会を作っていただいた守谷市・マインブルク市・ホストファミリー・家族に感謝しています。





■ 私立
■ 茗溪学園中学校
■ 3年 池場 美輝

ドイツで挑戦したこと

今回のドイツ派遣にあたって、挑戦したのは、コミュニケーションをいろいろな人ととることです。

初日はなかなか喋りかけることができなかったのですが、それ以降は言語や文化が違う人と会話をできる機会を活かそうと思い、積極的に話しかけました。

最後まで完璧な英語では話せませんでしたが、意思疎通は少しずつ取れるようになっていったことがとても楽しかったです。

ホストファミリーの紹介

私のホストファミリーはボーゼル家という4人家族の家庭でした。両親はあまり英語が得意ではなかったため、ドイツでの滞在中は、私のホストシスターが、両親と私の会話のほとんどを英訳してくれました。現地に行く前にメールでやり取りをしていたときも、私のためにできるだけわかりやすい英語に直してくれていました。

ホストマザーは家での困っていることがあったらすぐに教えてくれるなど、いつも助けてもらいました。

ホストファザーは仕事のため、関わるのは送り迎えが一番多く、車の中で話題をふってくれたのはとても楽しい時間でした。

ホストブラザーは5歳でドイツ語しか話せないため、会話は少なかったですが、ジェスチャーで私に自分のことを教えてくれました。家では一緒にゲームをしたり、ドイツの伝統的な遊びを教えてもらったりしました。皆が本当に家族の一員であるように受け入れてくれて嬉しかったです。

今後に活かしたいこと

今回の経験によって、他の文化で生きてきた人との会話の難しさを感じました。同じ言葉でも発音が違ったり、想像している物が違ったりと話していても会話がかみ合わないことが多かったです。今後も連絡を取り続け、相手の文化をより知っていきたいです。また、この経験を何らかの形で発信していこうと思います。



ドイツに行ってみて

これが私にとって初の海外でした。一週間という期間は行く前は長いと思っていましたが、いざ終わってみるととても短く感じます。

現地(ドイツ)に着いた初日は歓迎のパーティーがありましたが、緊張により会話を広げることができず、ホストファミリーに質問をされるだけでした。悔しい思いをしたまま一日目が終わり、二日目はバスでノイシュヴァンシュタイン城に行きました。バスではドイツのお菓子を紹介してもらい、少しだけ話すことができました。少しでも会話ができたことに喜びを覚えました。

そして四、五日目はホストファミリーごとでの自由行動の日でした。私のファミリーとはスーパーマーケットで買い物したり、ドナウ川の周辺にある街や、クルーズへ行きました。まだ自分からはあまり話しかけられない私にホストシスターがこれはドイツ語でこういうんだよー、このドイツ語はこういう意味だよと話題を振ってくれ、とても楽しい観光でした。

夜には受け入れてくれたマインブルクの方に守谷からの派遣団員がお礼を伝えるフェアウェルパーティーが行われました。今回は柔道や兜作り、守谷音頭を一緒に踊りました。ただ、それ以上にこの時間で沢山話し、相手のことを沢山知ることができ、次の日のミュンヘン観光では楽しく会話ができました！最終日にお別れするのは本当に悲しかったです。

ドイツでの生活が終わった今、単にこの一週間を楽しかったで済ませるにはもったいないと感じました。会話は増えましたが、自分では会話を振れない、英語を話していても発音が日本で学んだものと違う。自分が伝えようとしていることが伝わらない。悔しかったし、申し訳なかったです。しかし、この感情は実際に行って、相手と交流したからこそ生まれたものだと思います。だからこそ、ただ楽しかった旅行という思い出で終わるのではなく今後に活かしていきます。





守谷市立
愛宕中学校
3年 大平 顕

ドイツで挑戦したこと

挑戦したことは二つあります。1つ目はドイツでホストファミリー以外の人にもたくさん話しかけるといことです。ドイツに出発する前のホストファミリーとのメールのやりとりを通じて不安がなくなりました。マインブルクに行ってから、マインブルクに友達がいることで将来また行った時にも安心です。2つ目は挨拶をドイツ語でするということです。初めて会った時にドイツ語で挨拶したらとても喜んでくれました。

ホストファミリーの紹介

僕のホストファミリーはホーフシュテッター家でした。お父さんのフランツ、お母さんのアンドレア、13歳の長男セヴェリン、10歳の次男ユリウスの4人家族でした。

お父さんは建築関係の仕事をしていてとても家から近い場所に職場があったのでいつも僕たちのことを送り迎えしてくれました。お母さんは、ホップ農場で働いていて、いろいろな食べ物を作るのが得意でした。毎朝、朝ごはんには手作りのパンを出してくれたり、そのほかにもミュンヘンに行く時にはお腹が空くからといって、みんなに手作りのパンを持たせてくれたりしました。次男のユリウスは長髪が似合う可愛い男の子でした。ハンドボールをやっていて、僕もスポーツが好きなのでスポーツを通じて仲良くなることができました。13歳のセヴェリンは1番歳が近いこともあって1番仲良くしてくれました。そして彼は英語がとてもできるので、もしわからないことがあったらすぐに簡単に言い換えてくれたりしました。セヴェリンとはゲームをして仲良くなりました。

今後に活かしたいこと

僕は今回ホストブラザーやそのほかにマインブルクで出来た友達との友情をさらに深め、守谷とマインブルクの学生でフレンドリーマッチをしたいです。僕がホストファミリーと公園でサッカーをした時にボールがあれば意思疎通ができるということをととても実感し、サッカーがどれだけ楽しいのか改めて気付かされたからです。

サッカーを通じてお互いを理解し、認め合う関係づくりに発展させてスポーツを通じた姉妹都市交流をしたいと思っています。



国境を超えるもの

海外派遣に行くことが決まって、僕は「ドイツで挑戦してみたいことはサッカー」とプロフィールに書いて提出しました。すると、スポーツが好きな10歳のユリウスと13歳のセヴェリンがいる家庭にステイさせてもらえることが決まりました。

ホストファミリーが決まり、メールで連絡を取り始めると「アキラがくる週末におばさんの結婚式に行くよ。」と知らされました。ドイツの結婚式によべたら準備することはいくつかあります。まず、結婚する2人へのプレゼント選び、プレゼントのラッピング、着る洋服の準備です。僕はホストファミリーと相談して夫婦箸と箸置を選んで、ラッピングをしました。着る服は民族衣装のレーダーホーゼンを借りることにしました。

結婚式では僕だけ親族ではないのにホストファミリーとその親戚、そして花嫁花婿の記念撮影に加えてもらうことになり、感激して涙が出そうになりました。そして、お祝いの食事の時も家族と同じテーブルでした。パーティーは9時間も続いて、僕は食事の後にセヴェリンたちとダンスやサッカーをして過ごしました。

結婚式に出席させてもらえるということは、ホームステイに来た僕を家族のように受け入れてくれるマインブルクの人の優しさの表れだと思いました。

僕は1万キロ近く離れて暮らしている家族がこんなにも親切にしてくれて、絆が繋がったおかげで結婚式にも出席させてもらえました。

この派遣を通して僕が感じたこと。それは、人と人のつながりを大切にしたいということです。ホームステイが終わったからと言って、関係を終わるとしたらあまりにも悲しすぎます。でも、大丈夫です。ユリウスも、セヴェリンも、守谷にも来てくれるはずだし、来てくれたら、僕もホフシュテッター家のみんながしてくれたように歓迎する準備は出来ています。僕たちの

交流は始まったばかりです。将来、僕が結婚したらホフシュテッター家を結婚式に招待して、僕がしてもらったのと同じような楽しい時間を過ごしてほしいです。その時を楽しみに待っていてください！





守谷市立
 けやき台中学校
 3年 蒲池 真央

ドイツで挑戦したこと

私がドイツで挑戦したことはホストファミリーと会話することと自分の意志をしっかり伝えることです。ホストファミリーに英語で話しかけることは少ししかできなかったが、自分が思っていたより理解出来ていて嬉しかったです。また、お腹がいっぱいということや、困っていることをしっかり伝えることが出来て何の不自由もなく楽しく過ごすことができました。

ホストファミリーの紹介

私のホストファミリーはお母さんの Franziska（フランツィスカ）とお父さんの Matthias（マティアス）、娘の Christina（クリスティーナ）、弟の Matthias（マティアス）の四人と犬のレックス一匹です。

Christina は観光に行ったときに色々なことを教えてくれたり「何か困ったことがあったら私に言ってね」と言ってくれたりしてとても優しくかったです。弟の Matthias はサッカーとスターウォーズが好きでとっても元気でした。Franziska は凄く明るく、ご飯がとっても美味しくて朝から笑顔で「Good morning」といってくれました。父の Matthias は力仕事系をしてくれたり快適に過ごせるようにしてくれました。皆とても優しく、元気で明るく楽しい家族でした！



今後に活かしたいこと

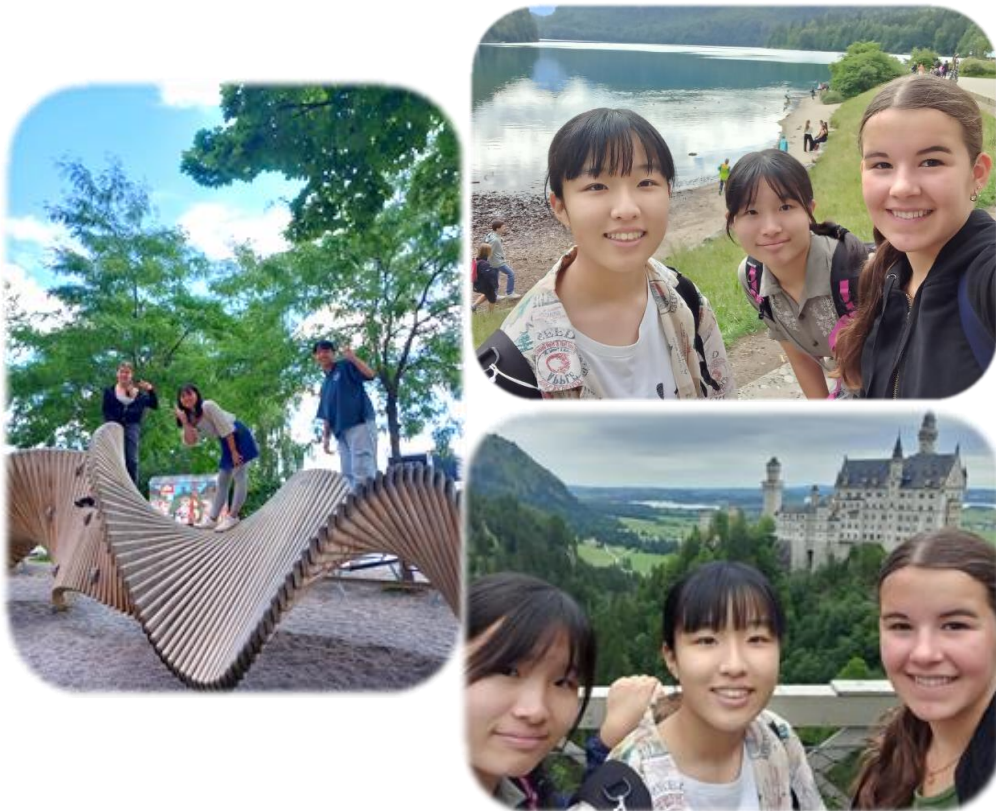
私は今回ドイツに行ってみて英語で言いたいことがあっても相手にうまく伝えることができなくて困りました。そこでもっとスラスラ喋れるようになりたいと思いました。この思いをモチベーションに、これからは今よりももっと英語の勉強を頑張りたいです！！また、今まで単語の勉強を疎かにしていたけれど、単語が分かったと文にできなくても伝わるとわかったので単語の勉強も頑張りたいです。



初めてホームステイをしてみて

今回の青少年海外派遣に参加出来て一番嬉しかったことは、自分と違う国に住むドイツ人とお友達になれたことです！青少年海外派遣に参加できてなかったら他の国の人と友達になれていなかったからです。ホームステイが終わった今も連絡をとっていてこの関係が長く続くようにしていきたいです。また、第一言語にしている国の人と喋るのではなくドイツ人で英語は第二言語なことが少し安心でした。なぜなら、ドイツの人達は私と比べられないくらい英語がペラペラでしたが、ドイツの人達も友達などに伝え方を聞いたりしていてどちらも完璧な英語ではなかったからです。Christina は私が単語だけで言ったり身振り手振りでしか伝えられなくても、理解しようとしてくれて思いをくみ取ろうとしてくれてそこからお互いが伝え合おうとすることが大切なんだなと思いました。お母さんやお父さんはあまり英語が話せませんでした。挨拶や簡単な英語だけでもお互いの気持ちは結構伝わるんだなと思いました。例えば、料理を作ってもらったときに料理の感想を伝えるなどです。おばあちゃんが一日だけ料理を作ってくれた日がありました。その日はおばあちゃんの家に行っておばあちゃんやおじいちゃんに挨拶して少し話してみたけど伝わってなさそうでしたが、作ってくれた料理がとても美味しくて「very delicious」というと伝わったのかとても笑顔になってくれました。お母さんの Franziska に何かを教えてもらったり、助けてもらったときに「thank you」というと凄く笑顔になってくれて、挨拶が大切なことや明るい気持ちになるのは世界共通なんだとわかりました。なのでどの国に行っても挨拶を大切にしたいです。

私は今回ドイツに行ってホームステイや観光などをしてとても楽しかったしもっと長く居たいなと思いました。次にこのような機会があったら参加したいし、それまでに単語が分からなくて文の意味を理解できなかったり話したいことが話せなかったのもっと英語を勉強していきたいです！！





茨城県立
並木中等教育学校
3年 藤見 颯悟

ドイツで挑戦したこと

僕はドイツで、現地の人ととにかくしゃべるということに挑戦しました。中学校三年間で培った英語と、まだおはよう等のあいさつやありがとうなどの簡単な受け答えしかできないドイツ語を精一杯駆使して、会話しました。意外と大人とは結構しゃべることができましたが、子供などはしゃべるのがとても早く聞き取ることに苦労しました。

また、僕は食べることが大好きなので、日本とはまた違うドイツの料理を堪能しました。基本出されたものは全て食べるようにしました。向こうはパンが主食だったので少しご飯が恋しくなりました。

ホストファミリーの紹介

僕の家族を紹介します。先ず上の写真で僕と一緒に写っている可愛い女の子はアンナです。アンナはどこか僕の妹に似ていて、とても活発で、食べることが大好きな女の子です。

そして次のページの左上にいるめちゃくちゃ大きい男の子が、レアンダーです。彼は16歳ですが、とても大きく、身長は195cm、体重は100kgを超えているそうです。彼はとてもフレンドリーで緊張している僕によくしゃべりかけてきてくれました。マリオカートとFIFAがとても上手いです。

最後に僕の第二のお母さんとお父さんである、ニコルとマーティンについて紹介します。ニコルはとても気づかいができる優しいお母さんで、マーティンは体も心も大きい面白いお父さんです。これが僕のホストファミリーです。



今後に活かしたいこと

僕はこの守谷市青少年海外派遣事業に参加して、「自分の思いを伝える」ことの大切さを学びました。普段通じる日本語が通じず、不慣れな英語を目いっぱい活用し、自分の思いが伝わったときには、とてもうれしかったです。自分の気持ちを伝えるには、まず自分から動かなければいけません。これから色々な国に行って、色々な人と出会うと思います。その時大切なのが、自分の気持ちをしっかりと相手に伝えることだと僕は考えます。そこで、今回ドイツにホームステイした経験を活かし、この先会う人と仲良くなろうと思います。



初めてホームステイをしてみて

僕は今回、守谷市青少年海外派遣事業でドイツに行ってきました。僕にとっては今回が初めての海外だったので最初の方は、楽しみという気持ちよりも不安だなという気持ちの方が大きかったです。荷造りやホストファミリーのお母さんと Gmail で話している時もずーっと不安でした。さあ、日本を出て、行きの飛行機では特に何もトラブルもなく、しっかり寝れて、ドイツ空港に到着した瞬間、緊張してトイレに行きました。その時僕の頭の中を占めていたのが、迫りくるホストファミリーとの対面に対する不安でした。そんな思いを胸に僕はホストファミリーと会いました。緊張している僕を彼らは抱きしめてくれました。僕はとてもうれしかったです。それから、僕のドイツ生活が始まりました。

僕はドイツで生活していく中で、日本とドイツの違いにとっても驚きました。その中でも僕が一番驚いたことはトイレです。ノイシュヴァンシュタイン城に行ったとき、僕はトイレに行きたくなり、公衆トイレに行きました。頭ではわかっていたのですが、やはりお金を払わなければいけないんだなと思いつくりしたのを今でも鮮明に覚えています。また、トイレの小便器の高さがとても高く、ドイツ人はみんな背が高いんだなと思いました。

僕がこのドイツ研修で一番楽しかったのはやっぱり、どこかに行ったことではなく、彼らとしゃべることが出来たことです。朝起きて、ごはんはもうできてるけどいつ食べたい？のような日常的な会話をそつなくこなすことが出来た時、一番うれしかったし楽しかったです。やはり人と話すときにはまず相手の伝えたいことを理解することが大切だと思います。

最後に、僕をこの守谷市青少年海外派遣事業に参加させてくれた、父さん母さんにとっても感謝しています。ありがとう。





茨城県立
竹園高等学校
1年 菊池 小夏

ドイツで挑戦したこと

私はドイツでこれやる？と言われてたらやる！というように、ここでしか出来ないことは何でもやろう！と思って過ごしていました。例えば、マインブルクのプールの方は気温18度で雨も降っていましたが、なかなかドイツの市民プールに行ける機会はないので泳ぐことにしました。三人同時に乗れる秒数カウンター付きウォータースライダーや、最大3.8メートルの深さのプールでの人生初の飛び板からの飛び込みを楽しみました。また、何人かのホストファミリーとプールでキャッチボールをして交流できたので、良い思い出です。

ホストファミリーの紹介

お父さんのマティアスは英語があまり通じませんでしたが、ダンケシェーンと感謝を伝えるとニコニコ笑い、パテの食べ方も教えてくれてとても優しくかったです。お母さんのフランツィスカは土日の自由行動で素敵な場所に案内してくれたり、集合場所の送迎や朝ごはんの準備などいろいろなことをしてくれました。私が街で流れている曲を歌っていると、手に持っていたアイスをマイクに見立てて、「歌手になれるわよ！」と言ってくれたり、ユーモア満載でとても楽しいお母さんです。13歳のクリスティーナは笑顔が眩しくて、いつも困ったことがないか心配してくれる優しい子です。私よりスラスラと英語が話せて、たくさん面白い話が出来ました。9歳の弟のマティアスはやんちゃで、庭のトラポリンで一緒にサッカーしたのが楽しかったです。また、祖父母が隣に住んでいて、バイエルン州の伝統料理のディナーに呼んでくれて、プレゼントしてくれたディアドルという民族衣装のお直しをしてくれました。犬のレックスはもふもふで、かわいく歓迎してくれました。

今後に活かしたいこと

ドイツに住む方たちとの会話に若干の不安がありましたが、全く問題ありませんでした。なぜなら、お互いに英語のネイティブではなく、ゆっくり話し合えるのでむしろコミュニケーションが取りやすかったからです。一週間ずっと英語で話していると、頭の中で日本語を介さずに思ったことを英語で伝えられるようになったので、自信が付けました。この経験から、一生懸命努力すればどんな環境でも適応することができる！ということが分かったので、今後も世界中の人々と交流したいです。



夢のような一週間

小学生の頃からずっと「いつか行けたらな...」と思っていた青少年海外派遣は、一瞬で過ぎ去って行くほど濃い最高の思い出になりました。ホストファミリーと初対面したとき、現実だと思えないほど嬉しくて舞い上がりました。この事業の醍醐味は海外旅行だけでは味わえない、現地に住む人々の生活を知り、交流出来ることだと改めて実感しています。例えば、朝食は穴の空いたチーズとドイツの黒パン、鮮やかなフルーツなど絵に描いたようでした。また、シャワーには扉が無かったり、コーラやヨーグルトが常温で置かれていることに戸惑いながらも、ヨーロッパらしい生活を楽しむことが出来ました。

特に思い出に残っているのはホストファミリーと過ごした土日で、ドナウ川のクルーズとレーゲンスブルク、ミュンヘン観光を楽しみました。ドナウ川ではたくさんの老若男女が水面に向かって真剣に石を投げていて、思わず私もクリスティーナ達と水切りに熱中しました。川岸にあるヴェルテンブルク修道院には醸造所とビアガーデンがあり、日本人の私は少し驚きましたが、ドイツではビールの文化があらゆる場所で根付いているのだと感じました。

日曜日に行ったミュンヘンは古いものと近代的なものが上手く調和した美しい都市でした。移動に使った地下鉄は映画で見たことがあるようなレトロな内装で、「登場人物になったみたい!」と伝えると、ホストマザーまで嬉しそうに興奮してくれました。さらに、一つ一つ異なるデザインの駅に衝撃を受け、心惹かれました。アイスバッハという川ではサーフィン!?している人がたくさんいて、見るだけでもエキサイティングでクセになりました。

観光だけでは決して味わえないドイツの生活を体験させてくれたホストファミリーとサポートしてくれた方々に感謝します。コロナウイルスの影響で人との距離が遠くなり、楽しみにしていた予定もたくさん諦めたりした中学校生活でしたが、遠く離れた国の人達と深く交流出来て、本当に夢のような一週間でした!





茨城県立
竹園高等学校
1年 沼田拓志

ドイツで挑戦したこと

今回の渡航で、わたしが挑戦したことは自分の長所を発揮し、多くの人とコミュニケーションを図ることです。店の店員さんや街の人などに挨拶や笑顔で会釈をするなどして会話のきっかけを作ったことで、よりよいコミュニケーションができたと思います。更に、フェアウェルパーティーでは自分から積極的に話しかけ、写真を取り、たくさんの思い出を残すことができました。高校生という心身ともに大きく成長する時期に自分とは違う価値観を持つ人達に多く出会い、交流できたことは、自分にとって大きな成長につながると考えます。

ホストファミリーの紹介

私はシュタンゲルマイヤー家にホームステイさせていただきました。シュタンゲルマイヤー家は父のシュテファンさん、母の聡子さん、長女のアメリーさん、長男のアントンさん、次男のコリンさんの5人家族でした。彼らはいつも明るく、笑顔が絶えない家庭でした。また、何事においても応援してくれる家庭でした。特に母の聡子さんは「やってみればいいじゃん。失敗しても次やればいいんだし。」と何にでもチャレンジさせてくれました。またホストブラザーのアントンやコリン、ホストシスターのアメリーは、いつも私のそばに居てくれました。年代も近かったので、話しやすく、共通の話題で盛り上がることも多々ありました。更にシュタンゲルマイヤー家の飼い犬であるチェスターともお土産として持っていったフリスビーと一緒に散歩をするなどしてとても良い関係を築くことができました。ナーバスになっていた私を支え、何にでもチャレンジできる環境を整えてくれた彼らには、感謝しかありません。出会うことができとても幸運でした。

今後に活かしたいこと

挑戦したことでも書いた通り、コミュニケーション能力をより高めることができました。その反面浮き彫りになった問題もあります。それは英語慣れしきれていなかったことです。自信があった英語もいざ海外に行ってみると聞き取ることができないこともありました。それを解消するために今回得たホストファミリーとの連絡網を駆使し、連絡を取り合うことで、高度な英語に磨き上げていきたいと思っています。



一生守りたいつながり

私はこのホームステイを通してたくさんのつながりを感じました。紹介したいと思います。

まず団員たちとの繋がりで、事前研修のころからみんなとたくさんコミュニケーションを取りました。これが固い絆や友情を作り最高のホームステイの源になったと思います。ホストファミリーとは、受け入れ家庭が決まったときから G-mail での会話を多く交わし、お互いのことを紹介したり、自分の要望を伝えたりしました。その後 Snapchat と呼ばれるチャットアプリを使い、より密に連絡を取るようになりました。渡航前から、ホストファミリーとたくさん会話することができたので、実際会ったときにすぐに打ち解けることができました。フェアウェルパーティーでは、直前に団員の一人が体調不良で会場に来ることができなくなってしまうというアクシデントも発生しましたが、お互いに協力してなんとかカバーして完璧なパフォーマンスができました。パーティーの中ではたくさんのホストファミリーたちと話し、写真を取り、たくさんの思い出を残すことができました。インスタグラムを交換しとても親しくなった人もいます。このような人たちとは連絡を取り続け、友好関係をキープしていきたいです。

このように、たくさんのことを学び、得て帰国することができたのは、自分一人ではなく、親や市役所の方々の支えがあったことを忘れてはいけないと思っています。その支えに感謝し、今後の生活に活力を与えていきたいです。ドイツで学んだことは決して無駄にはなりません。しません。最高の仲間と、最高のホストファミリーと、最高のサポートの上で無事に成功したホームステイは私の一生の思い出です。この場を借りて感謝したいと思います。このような機会を与えていただきありがとうございました。





茨城県立
下妻第一高等学校
1年 本間怜奈

ドイツで挑戦したこと

挑戦したことは積極的にドイツの方々とコミュニケーションを取ることです。日本では自分が反応を示さないものでも、「あれは何?」「日本にも似たものがあるよ!」と言って距離を縮めることに挑戦しました。私は自分の英語力にあまり自信がなく学校の授業などでも積極的に話すことができませんでした。しかし、ホストファミリー以外にも自分からたくさん話しかけることができ、たくさんの人と仲良くなることができました。

ホストファミリーの紹介

私がホームステイした家庭はホストファザーのゲルオクとホストシスターのザスキアの家です。ホストファザーはとてもやさしい方で、初めてあったとき「困ったことがあったらなんでも言ってほしい。遠慮は要らないよ。」と言い、私が困っていると、翻訳アプリを活用して意思疎通を図ろうとしてくれました。また、車の会社で働いていてホストファザーの運転するドライブがとても好きでした。日本についてたくさん質問してくれて、会話をするきっかけをたくさんつくってくれました。ホストシスターは、日本のゲームやアニメが大好きで部屋にはたくさんのフィギュアがあり一緒にマリオカートをやろうと誘ってくれました。ゲームの操作でわからないことがあると親切に教えてくれて、一緒に楽しむことができました。また、私が少しでも疲れた様子を見ると、「大丈夫?」「眠い?」と声をかけてくれるとても優しい方です。一緒にたくさん写真をとって、とてもいい思い出を一緒に創ることができました。

今後に活かしたいこと

自分の気持ちや考えを素直に伝えることです。日本では、相手に失礼なのではないだろうか、わがままなのではないのだろうかと深読みしてしまい曖昧な態度をとってしまうことがよくあるけれど、ドイツでは自分の言葉で伝えない限りわかってもらえません。もちろん自分勝手なことは良くないけれど、相手の気持ちをうかがってばかりいることはよくないことだと改めて気付かされました。今回気づいたことをこれからの人間関係に活かしていきたいです。



ドイツで感じた文化の違い

私はこの海外派遣で日本とドイツの文化の違いを大きく感じました。特に感じた文化の違いを大きく分けて3つ紹介します。

1つ目は、英語力です。ドイツは日本と同じく公用語は英語ではありません。ですが、私と同じ年の子はもちろん、11歳の日本で言う小学5年生くらいの子が流暢に英語を話すことができています。確かに、ドイツ語と日本語を比べたらドイツ語のほうが英語に近い要素を持っているかもしれません。しかし、英語の教育が日本と大きく異なっているのだと思います。これも一つの文化の違いなのではないかと思います。

2つ目は、道路です。マインブルクには信号は一つしかありません。ですが、私が訪れたほとんどの地域が信号が少なかったように感じます。道の脇にスピードが表示されるものもありましたが、そこまで気にしていないように感じられました。そのため、車のスピードもまばらで、左ハンドルだったので、なれない私は少しヒヤヒヤしました。しかし、マインブルク市をホストファザーの運転でドライブするのは、自然豊かな景観で開放的でとても楽しかったです。また、自然豊かなドイツではノイシュヴァンシュタイン城に行くまでの道のりでバスの中から、牛や鹿などが見られました。

3つ目はスーパーマーケットです。私は以前からドイツのスーパーマーケットに興味があり、ずっといつてみたいと思っていました。ホストファミリーにリクエストすると連れていってくれました。ドイツのスーパーマーケットはとにかく広く、カートもとても大きいです。また、たくさんの種類のお菓子、野菜、果物があり、私が日本で全く見たことがないようなものがたくさんありました。例えばキャベツでも、日本と比べると大きいし、丸いし全然違う野菜のように感じました。見るものひとつひとつが新鮮でキラキラしているように感じました。

この海外派遣を通じて異文化を身で感じられ自分にとってとても良い経験になったと感じました。この経験で学んだことを自分の将来に活かしたいと思います。このような経験をさせていただきありがとうございました。





筑波大学付属
高等学校
2年 上田 未麗

ドイツで挑戦したこと

せっかくドイツに行けるのだからドイツのことをたくさん知ろうと思い、事前にメールでドイツの伝統料理を食べたいと伝えたり現地でホストシスターに「これってドイツ語で何て言うの？」と積極的に訊くようにしたりしました。ホストマザーが毎晩違うレストランに連れて行ってくれて毎晩違う料理を食べさせてくれたおかげで今まで知らなかった様々なドイツ料理を食べることができました。また、コミュニケーション能力を高めることも今回の滞在の目標だったので、他の家庭のホストファミリーにも積極的に話しかけてドイツの友達をたくさん作りました。

ホストファミリーの紹介

私のホストファミリーのアルトヴァッサー家は4人家族です。父の Jurgen はとても面白い人でいつも冗談を言って笑わせてくれました。知識が豊富で家の中や観光地で色々なことを教えてくれました。母の Beate はとても優しい人で常に私のことを気遣ってくれました。また、よく笑う人で一緒に話していてとても楽しかったです。18歳の長女の Annkristin は夕食時や最終日の朝しか一緒に過ごせませんでしたが、食事中にたくさん話しかけてくれたり食後に UNO をして遊んだりとても楽しい時間を共有できました。英語がとてもわかりやすかったです。16歳の次女の Isabel は優しくて可愛くて美人でおしゃれで面白くて私の最高の友達です。いつも一緒にいてお互いについて教え合ったり冗談を言い合ったりふざけ合ったりして濃密な時間を過ごしました。箸の使い方を教えたときはとても真剣に練習していて意外と負けず嫌いだとわかりました。ギャップ萌えでとても可愛かったです。彼女とは今でもやりとりを続けています。

家族の仲がとても良く、暖かい雰囲気の家でした。別れのときは私だけでなくホストファミリーも全員涙を流してくれました。

今後に活かしたいこと

今回学んだことはたくさんありますが、特に感じたのは外国人でも同じことで笑って同じことで泣ける同じ人間だということです。だから、国籍や見た目で人を判断するのではなく話しかけて相手のことを知り、その人の人柄や性格を大切にしたいと思いました。また、ホストファミリーが日本にとっても興味を持ってくれていたのは嬉しかったのですが、日本について訊かれた時に自分でもわからなくて答えられないことがあったので、日本文化をもっと学びたいと思いました。



第二の故郷と家族、そして最高の友達

実は私は4年前の中学1年生の時にもこの事業に応募していました。その時は不合格でしたが今回ようやく合格を掴み取り、ドイツに行くことができました。精神的に成長し英語力も発達した高校生の今行けたことで、現地の方々と会話でき異文化の地でも楽しめたため良かったのではないかと思います。ドイツに着いて一番最初に感じたのは日本の夏では考えられないくらい寒いということでした。日本を出た時の半袖短パンのままの私の姿を見たホストファミリーはとてもびっくりしていました。私が泊まった家はとても広く、恐らく4階建てなのですが全部を見ることはできませんでした。それでもホストマザーに”Our house is not so large.”と言われてとても驚きました。

ホストファミリーは本当にみんな優しく、「何か飲む?」「お腹空いてない?」「トイレ行かなくて大丈夫?」などいつも私のことを気にかけてくれました。また、出国の前日にはサプライズでプレゼントを用意してくれていてびっくりしたけど歓迎してくれていた気持ちが伝わってとても嬉しかったです。最終日はホストファミリーも空港まで来てくれると思っていたのに、空港に行くバスに乗る直前にマインブルクでお別れと知り涙が止まらなくなってしまいました。ホストファミリーの方々も泣いてくれていたので、別れを惜しんでくれるということは一緒に過ごした時間を楽しんでもらえたのではないかと思います。

今回のマインブルクへの派遣は私にとって初めての海外でしたが、この体験は一生忘れられない大きな財産になりました。貴重な経験をさせてくれたドイツやマインブルクは私の第二の故郷となり、私を本当の家族のように扱ってくれたホストファミリーは私の第二の家族となりました。そして何より、一週間ずっと一緒にいてたくさんの楽しい時間を過ごしたホストシスターは私にとって最高の友達です。この度はこのようなホームステイの機会を設けてくださり本当にありがとうございました。





茨城県立
竹園高等学校
2年 佐藤丸

ドイツで挑戦したこと

私がドイツで挑戦したのは、食べ物です。個人的で、細かいことではあります。しかし、私は好き嫌いが激しいため、なかなか大変でした。例えばドイツで多く飲まれている spezi(シュペッツィ)も最初はかなり勇気を出しました。しかし、どうにかしてコミュニケーションをしてシュペッツィをコップ一杯だけ注文してもらって飲んでみました。そうすると、とても気に入ったのでその後のホームステイ期間はよく飲むようになりました。やはり食べ物はその土地の文化を強く反映しているため、勇気を出して食べてみると口に合わずとも文化を感じることができました。

ホストファミリーの紹介

ニコル：一番親しくなったホストファミリーだと思います。観光地に行ったときは「このモニュメントはこういう理由があって建てられたんだ」と教えてくれ、車の移動中も「ドイツの公園ではこういうのがあるんだ」と様々なことを話してくれました。風邪を引いたときはずっと家にいてくれて、「熱を出すのは誰だってあることだから、気にしなくていいよ」と言ってくれました。

マーティン：元スナイパーで、現 BMW のメカニック！一緒にドナウ川で水切りをしたり、パークで遊んだりしました。ホストファザーであり友達のような距離感です。

レアンダー：身長 195cm の 16 歳。本当に僕よりも年下なのか怪しい言動をします。めちゃくちゃふざけるので一緒にいるととても楽しかったです。毎回レストランのメニューのドイツ語を英語に訳してくれるのもレアンダーでした。

アンナ：ノイシュヴァンシュタイン城のとき、進むのが遅いコンビとしてずっと一緒にいました。けれど、アンナが遅かったのはよく考えると僕の分の水を背負っていたからなのかも 思っています（アンナありがとう）喋るのが大好きな子で、一緒にいるとずっと話していました。

今後に活かしたいこと

海外で文化も言語も違う人とかなり密接にコミュニケーションしたので、自信ができました。そのため、海外にもっと出かけてみたいです。ヨーロッパもヴェネツィアやクイズ発祥の地のダブリンも行ってみたいです。また、海外旅行の手続きを知ったので自らの日常と海外旅行が地続きになったので、海外に行くというハードルが下がりました。今回のホームステイは多くの人にサポートがあって成功したため、すべての海外旅行の手続きを知ったわけではないですが、実際に海外の空気感を肌で感じることはできたのは大きな経験でした。この経験は、他の挑戦をするときに比較して自分を勇気づけることができるようにさせると思います。



国境を超えるもの

今回のホームステイで特に感じたのは、ありきたりのことではありますが人の優しさです。今だから言えますが、私は最初の羽田空港でとても不安を感じていました。これからどうなるのか、一週間なにも事故や怪我はしないで無事に帰ってこれるのか(実際は一日ちょっと風邪を引いちゃいましたが)と色々考えながら飛行機に揺られ、マインブルグに向かいました。しかし、マインブルグでホストファミリーとの初顔合わせのとき、ホストマザーのニコルは「ここでは食べなければいけないものなんて一つもないよ。口に合わなかったら全然残してもいいし、感想も正直に言ってほしい」と言ってくれました。その言葉は一気に私を安心させてくれました。また、風邪を引いたときはニコルがずっと家にいてくれて、数時間ごとに体調をたずねて病気に効くお茶を出してくれました。また、風邪を引いたことを謝らなくていいとも言ってくれました。島田さんも、ミュンヘンに行かずに僕が滞在している家に来ていざという時のために待機してくれました。団員のメンバーの大平くんも LINE で風邪薬が足りなかったら自分が持っているから渡せるよと言ってくれました。ホストブラザーのレアンダーと一緒にホームステイした藤見くんはミュンヘンのお土産を買ってきてくれました。日本に帰る途中でも団長がいつも近くにいてくれましたし、羽田では平日にも関わらず母が迎えにきてくれました。帰った後の帰国報告会では団員の他の親御さんからも、帰ってこれたことを喜ばれました。ドイツで熱を出してベッドに潜っていたときはとても不安でしたが、振り返るとこれだけ多くの人が心配し行動してくれました。特にニコルは僕のことを気遣ってくれ、当たり前ですが海外の人も同じように心配してくれるのだと思いました。私は今回のホームステイで多くの優しさに触れました。そのため、今後なにかに困っていたり悩んでいたりする人がいた場合、少しでもいいから行動したいと思いました。



“Wo ein Wille ist , ist auch ein Weg”

2023 年 青少年海外派遣事業 団長 吉田 篤子（守谷市国際交流協会）



「意志あるところに道は開ける」本当に意志があるなら実現できるというドイツの諺です。

正に今回の 10 名の団員のことです！コロナ禍で中止となっていた守谷市青少年海外派遣が 4 年ぶりに行われることとなり、約 4 倍もの倍率の中から選ばれ派遣されたのです。

応募してきた全ての方に機会をと思い面談に立ち会いましたが、10 名の枠が有り最後は如何に姉妹都市マインブルクに行きたいかという強固な意志があるかで私は判断しました。その強固な意志とおり、研修時も一人も欠けることなく、10 名全員がマインブルクを訪れ、それぞれが素晴らしい体験をすることができたのです。

32 年前に守谷市とマインブルク市が姉妹都市締結をし、それからの長いお付き合いですので、本当にヨーロッパの親戚の家にホームステイをしている安堵感があつたに違いありません。私自身も長いお付き合いのある家にホームステイさせて頂きましたので、何か我が家に居る感覚で、日本そばと天ぷらを振る舞った時は、食後リビングでご夫妻と一緒に昼寝をし、自分の高いびきに驚き笑われてしまった一幕もありました。

中学生、高校生で市の派遣により姉妹都市にホームステイをし、人間関係を構築できたということは、これからの人生において自信と財産になることでしょう。私事ですが、海外に行き始めたのは航空会社に入社し、仕事でのフライトばかりで、ただ到着地のホテルに泊まるという味気ないので、もちろんホームステイをする機会などありませんでした。

学生時代より国際交流に興味がありましたので、東京より守谷に越してきた次の年に守谷市国際交流協会が設立されると聞き、真っ先に仲間に入り今日まで活動しています。10 名の皆さんも帰国したら終わりと言うことでは無く、今回の素晴らしい体験を生かしていく、これからがスタートなのです。

守谷市はドイツのマインブルク市と 32 年前から、アメリカのグリーリー市と 30 年前から姉妹都市締結をしている魅力ある素晴らしい市です。5 年前にはグリーリー市にホームステイさせて頂き、University of Northern Colorado の日本語講座を聴講してきました。姉妹都市ゆえにできた体験に今でも感謝しています。

皆さんが “Wo ein Wille ist , ist auch ein Weg “ の精神で、世界に大きく大きく羽ばたいていかれることを切に願っています。若い皆さんの未来は無限大です!!



これからの国際交流

2023 年 青少年海外派遣事業 引率 島田 晃広（守谷市役所 市民協働推進課）



今回の青少年海外派遣は新型コロナウイルス感染症の影響で4年ぶりかつ私が初めて携わる事業かつ引率者というトリプルパンチで、始めは不安な気持ちが大きくありました。そんな中、私の不安を取り除いてくれたのは、吉田団長と10名の団員たちでした。4回の事前研修を行いました、吉田団長のリーダーシップのもと、新しいことにどんどん挑戦し、吸収していき、団結力を高めていく団員たちを見ているうちに今回のメンバーならどこに連れて行っても大丈夫と思えるようになりました。そして、絶対に団員たちには最高に楽しく、記憶に残る派遣にし、今後の成長への大きな糧にしてもらいたいと、全力でサポートしようと思えました。

派遣の日を迎え、出国日には朝早い時間にもかかわらず、保護者の方が横断幕を持って見送ってくれました。そのおかげで団員たちもリラックスして、長時間のフライトを迎えることができました。13時間を経てミュンヘン空港に到着し、マインブルク市の担当者たちが出迎えてくれました。団員は長時間のフライトにもかかわらず、日本とは違う空気に胸を弾ませているようでした。

派遣中はマインブルク市の用意してくれたプログラムやホストファミリーと時間を過ごしましたが、最初はうまく言語が通じずに、消極的な団員もいました。しかし、マインブルクの方たちは本当に優しい方たちが多く、緊張している団員たちに積極的に話しかけてくれました。日を重ねるごとに団員達からも話すようになり、打ち解けていく姿を見て、大変うれしくなりました。

私もホームステイをさせていただきましたが、忙しいにもかかわらず、常に私を気にかけて、優しい言葉をかけてくれたホストファミリーに大変温かい気持ちになりました。私自身英語があまり話せず、コミュニケーションがうまくいかない部分もありましたが、言語や文化を超えて伝わるものがあると改めて実感することができました。

派遣期間もあっという間に終わってしまい、ホストファミリーとのお別れを迎える時には、本当の家族のように別れを惜しむ姿が印象的で、また必ず会おうと再会をすべての団員が望んでいるようでした。事後研修も終わり、今回の派遣のプログラムは終了しましたが、大きな成長を見せてくれた団員たちは私にも大きな刺激となり、今後の国際交流事業へのモチベーションとなりました。参加してくれた団員達も今回の経験を、ただの素晴らしい思い出で終わらせるのではなく、今後の大きな成長の糧にしてくれると確信しております。

最後にこの事業を支えてくれた MIFA の皆様、団員たちを支えてくれた保護者の皆様、フィヒトナー市長をはじめ今回の訪問を歓迎してくださったマインブルク市の皆様、今回の派遣事業に尽力してくれた同僚、何より団員を先頭で引っ張ってくださった吉田団長、新しいことに挑戦するすばらしさを教えた団員の皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。





STADT
MAINBURG

++ NACHRICHTEN ++



BESUCH AUS JAPAN – ABWECHSLUNGSREICH UND INFORMATIV

Es war wieder sehr bereichernd und abwechslungsreich. Seit über 30 Jahren besteht die Partnerschaft der Stadt Mainburg mit der japanischen Stadt Moriya. Über 60 Besuche erfolgten bereits, vor einem Jahr waren Mainburger Jugendliche in Moriya. Nun vom 26. Juli bis zum 1. August waren zehn Jugendliche und zwei Betreuer aus Mainburgs Partnerstadt Moriya zu Besuch in Mainburg. In diesen sechs Tagen bestand ein volles Programm, so dass die Jugendlichen viele besondere Eindrücke mit in ihre Heimatstadt nehmen konnten.



Am Donnerstagmorgen wurden die zehn Jugendlichen mit ihren zwei Betreuern, eine von der Stadt Moriya und eine Vertretung der MIFA (Moriya International Friendship Organisation) von BGM Heimit Fichtner im Rathaus begrüßt.



Das Märchenschloss diente dem Disney-Schloss im Themenpark Tokio als Vorlage. Deshalb wollen alle Gäste aus Moriya gerne das Original bestaunen, weshalb die Besichtigung geplant worden war.

Beim Brotbacken in der Butterbrotwerkstatt Walkertshofen, haben die Gast- und Partnerkinder je ein Laib Brot für das Wochenende in der Familie gebacken. Der Tag begann mit einem Butterbrot oder Marmeladenbrot. Dann wurde der Teig für das Brot vorbereitet und es wurden Laibe geformt. Zur Stärkung gab es kleine selbstgebackene Fladen mit Speck, Sour Cream und Gemüse. Auch Naturfladen mit selbst geschüttelter Butter waren schmackhaft.

Alle Materialien zur Herstellung der Hopfenseife stehen bereit.

Außerdem machten die Gast- und Partnerkinder Hopfenseife selbst. Hier ist eine Hopfenseife mit japanischem Schriftzeichen für „Bier“ entstanden.

Freitag auf dem Hopfenhof Stiglmeier in Altenhofen bekamen die Kinder alles über das grüne Gold Hopfen gezeigt. Hier üben sie die Drähle (an denen der Hopfen wächst) in der Erde zu verankern.



Geschichten aus dem Hopfenland

＜日本語訳＞

日本からの派遣　—様々な内容で有意義な交流—

今回も非常に様々な内容で有意義な交流だった。マインブルク市と日本の守谷市との姉妹都市交流はもう30年以上続いている。すでに60回以上の訪問が行われ、去年、マインブルク市の若者たちが守谷市を訪ねた。そして今回、7月26日から8月1日にかけて、マインブルク市の姉妹都市である守谷市から10名の若者たちと2名の大人の海外派遣団がマインブルク市に来た。この6日間、海外派遣団の若者たちは多くの特別な経験を国に持ち帰ることができた。

写真の説明

（左側上）

木曜日の朝、市長のヘルムート・フィヒトナーはゲストたちを市役所で歓迎した。

（左側下）

東京にあるディズニーランドのお城はこのお城に基づいて作られた。そのため、お城を見学した。

（右側1番上）

パン焼き教室のパン作り体験で、子供たちが週末にホストファミリーで食べるパンをそれぞれ焼いた。パン焼き教室の朝食はバターパンやジャムパンで、その後パンの生地をこねて、パンを焼いた。ベーコン、サワークリーム、野菜入りの自家製フラットブレッドも、自家製バター入りのナチュラルフラットブレッドもおいしかったとのことだ。

（右側上から2番目）

ホップ石鹼の材料

（右側上から3番目）

子どもたちがホップの石鹼も自分で作った。「ビール※」という漢字が刻み込んだ石鹼もあった。

（右側一番下）

金曜日に、アッテンホーフェンにあるシュティーゲルマイヤーホップ農場を見学した。写真では、ホップが伸びるワイヤを地面に固定する練習

※酒という漢字

フォトメモリー





保護者の声

団員の保護者の皆様からのご意見・ご感想の一部を紹介します！



市で運営し、また長年継続の事業でもあるので、安心して子どもに参加を促すことができました。また事前研修でも様々なご指導をいただき、ありがとうございました。

マインブルク市民に本当の家族のように大切にしてもらうことを体感してくれたらと送り出したが、期待以上に受け入れてもらい感謝しています。日程があと数日だけでも長いと良かったが、短くスケジュールが過密気味だった。

今までは広報を見てもすごいなあ…と見ているだけでしたが、自分から能動的・積極的になることでこんなにも世界が広がるって素敵なことだと思います。同じチームの仲間との出会いも素敵でした。毎回笑顔で過ごし楽しくて帰りたくなかったと。これからももっと世界で羽ばたけるように外に目を向けて成長できたらと思います。

この度は、貴重な活動に参加させていただき、本当にありがとうございました。今後もこの事業を継続していただくようお願いいたします。何かお力になれることがありましたら親子でぜひ協力したいと思っています。

長年続いているということは、皆様の多大なる努力の賜物だと思います。とても素晴らしい有意義な本事業に感謝します。

子どもが世界は広いこと、異文化の人たちとも心を通わせることができること知り、人として成長してくれたように思います。

今後の進路を考える中で、自分を見つめる良い時間になったと思います。子どもにとって一生の宝物になる経験をありがとうございました。

編集後記

第30回守谷市青少年海外派遣事業は、4年ぶりの開催ということもあり、このチャンスを逃したくないという強い意志を持って申込みした学生が数多くいました。

そんな中選ばれた派遣団員は、高いコミュニケーション能力と協調性を備えた、個性豊かな中学生5名と高校生5名の学生たち。研修初回から、年齢や性別にとらわれることなく、和気あいあいと意見交換をしていました。また、回を重ねるごとに、派遣団の仲間であるという意識を強くしていき、泣いたり笑ったりの時間も一緒に共有するようになりましたね。

帰国日当日の報告会では、「楽しかった」「コミュニケーションが取れて、自信がついた」という声が多くある一方で、「ドイツの子たちは、母国語ではない英語を上手に話していて驚いた」と少し悔しそうに話す団員もいました。ほとんどの団員が「もっと実践的な語学力を身に付けた」という高いモチベーションを持ち帰ってきたように感じました。

語学以外のことでも、短期間の滞在にも関わらず、異文化へ肯定的な理解を深めたり、逆に日本文化の良さを再発見したりと、国際人としての素地を育んできた様子が見受けられました。また、事前研修でも繰り返し触れた「何にでもチャレンジ」の精神を十分に発揮し、さらに前向きな行動力や発展的な考え方を、マインブルクで身に付けてきてくれたこともよく分かりました。

自分では気付いていないかもしれませんが、皆さんは、これから何にでもなれます。まさに可能性そのものです。派遣団員としての経験を誇りに、これからも、日本中の、世界中の、たくさんの人たちと出会い、多くのチャレンジを重ねながら、自分自身の成長を楽しんでください！

皆さんのご活躍を、心から応援しています。

最後になりましたが、当事業にご尽力いただいた団長の吉田篤子さんをはじめ、派遣団員の選考や研修にご協力いただいた守谷市国際交流協会の皆様方に、心から感謝申し上げます。

守谷市役所 生活経済部 市民協働推進課